

IV. キャリア再考への序章

学びの森の住人たち(18)

—学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—



アウラ学びの森 北村真也

この原稿の各章を貫いている一つの大きな文脈は、不登校という現象には、現代社会が抱えるさまざまな課題が表現されているのではないかという社会臨床学的な視点です。だから私は、不登校の子どもたちが変容を遂げ、やがてそのキャリアを形成していこうとするエピソードやインタビューを丁寧に拾い上げながら、それを通して彼らが育った家族や学校、そして社会そのものを見つめてきたのです。そういう意味では、不登校というのは社会を見つめる有効な窓のようなものだったのかもしれませんが。

学校という社会に適応しなかった彼らは、やがてさまざまな形で追い詰められていきます。それは、昼夜逆転やひきこもりといった生活面で、発熱や頭痛、あるいは腹痛といった身体面で、さらには対人不安、強迫症状、情緒不安定といった心理、精神面で、その他、発達面やパーソナリティに還元される問題など、それらは実に様々な形で表現されていきます。

私たちは、そんな彼らのコトバによらな

い表現から、その奥に横たわる文脈を読み解き、それをコトバによる文脈へと置き換えていく作業に関わっていったのかもしれませんが。そして、そこで語られるのが、個人の物語です。孤独なリストカッターとして登場したアッコ。得体のしれない不安と対峙してきたサトル。会話のない両親のもとに育ちコミュニケーションに対して大きなコンプレックスを抱かずにはいられなかったヒロシ。お腹が痛くて、いつまでも教室に入れず2つも高校を辞めることになっていったユキエ。そしてみんなが顔見知りという田舎の小さな社会で育ちながら、メイクをしないと外に出られなくなってしまったカオリ。そこには、彼らの切実で状況と、それらを乗り越えていこうとする物語がありました。そして彼らは、自分たちの物語を描きながら、今まで分断され、見失っていた自分自身を取り戻し始めたのです。

そんな彼らも、やがてアウラの森を巣立っていきます。高校や大学へと進学し、そこで多くのことを吸収し、それぞれのキャリアを形成していきます。ここでは、そん

な不登校を経験した彼らのキャリア形成の過程から見えてくるものを拾い出し、あらためてキャリア形成そのものを見つめ直してみたいと思います。



1. 不登校への俯瞰的視座

不登校支援の最大の難しさは、その多様性にあるように思います。支援の現場におられる方であれば誰しもが実感されているように、その状況は一人一人大きく違うのです。本来、不登校という社会現象を大きく俯瞰的に捉えると、それは家族や地域を含め多様化する子どもたちの生活世界と、近代システムとして機能する学校というリジッドで単層的なフレームとの乖離として生じている現象として捉えられるように思います。言い換えればそれは、すでにポストモダンな社会へと移行してしまった私たちの生活世界を未だ近代的なシステムとして機能する学校が十分に受け止められなくなってきた証でもありと考えられるのです。

近代システムは、どこかに理想的な正解モデルを前提としています。雑多な状況をこの正解モデルのもとに序列化させて評価

を与え、いかに効率よく正解へと導いていけるかに価値をおいてきたのです。そして、そのシステムは常にモノログ型。つまりシステムそのものは変化しないわけです。システムが更新されると、混乱が生じると考えられているのです。ラウンドテーブルの学校関係の参加者がよく口にしてきたことは、「学校では、システムそのものの是非を問えない」ということでした。「学ぶってどういうこと?」、「学校の意味って何?」、「生きる力って、私たちにあるの?」これらの問いが学校内で話し合われることは、まずないそうです。それは、禁じられた問いなのかもしれません。

それに対して、ポストモダンなシステムは、多様性を前提としています。次々と変化する状況をまず引き受けているのです。だから、システムそのものがダイアログ型であり、どんどん自己更新をすることで、この多様性を吸収しようとするダイナミズムを持っています。つまり先の学校の例でいえば、具体的な問題を巡っても、それが「学校って何?」という大きな問いにいつでも戻されるような議論が交わされるシステムなのです。ここでは、絶えずその意味が問われていくことになります。

ある意味、現代社会の持つ多様性がプリントされた不登校の子どもたちが、モノログな学校というシステムのもとで不適応を起こすことは、決して考えにくいことではありません。いわば当然の結末かもしれません。それは、異質なもの同士の葛藤というカタチで表現された状況であり、どちらか片方にその問題性が集約されるもので

はないはずです。でも現実には、子どもたちがその問題を引き受けるのです。

不登校の子どもたちはたいてい、何らかの具体的な名前を持った問題を抱えています。アッコは〈リストカット〉、サトルは〈対人不安〉、そして〈ひきこもり〉、ヒロシは〈コミュニケーション・コンプレックス〉、ユキエは〈過敏性腸症候群〉、そしてカオリは〈醜形不安〉に苦しんでいたのです。そして具体的な名前は、彼らにその問題のイメージを提供するのです。これはラベリングと言われていています。しかし彼らの多くは、それがどうしてなのかわかっていませんでした。ただ不安なのであり、ただ苦しいのであり、ただお腹が痛くなるのです。そして、わからないからこそ余計に自分自身を責めたり、卑下したりしながら、次第に自信を喪失していくのです。一旦、自己肯定感がなくなってしまうと、社会に対する信頼感も失われていきます。彼らにとって、社会はいつも恐ろしいものに思えてしまうのです。社会に対する不安が彼らに襲い掛かり、ますます自分の殻に閉じこもるようになるのです。そこにはどうしようもない状況へと突き進んでいくような悪循環のループがあるわけです。

不登校に対する俯瞰的視座は、私たちにある矛盾を突き付けます。本来、現代社会の多様性が子どもたちに表現され、その多様性ゆえにモノローグで単層的な学校というシステムの中で不適應を起こしたのであれば、その課題は、学校というシステムを介して社会に再帰すべきなのではないだろうか？ つまり、学校や社会そのものが、

不登校の子どもたちから何を学びとれるのかが、問われているように思えてならないのです。不登校という現象を前に、問題の子どもたちをどれだけ多く見つけだし、彼らに何らかの施しを与えるのではなく、そこから見えてくる課題を、より大きな社会へと再帰させる仕組みをどう考えるのかということの方が、より重要なことのように思えてならないのです。

